

万葉集における人称代名詞の連体修飾について

——中国語欧化文法を考える一視点

稲垣智恵

はじめに

日本語に人称代名詞というものがあるかどうかは諸説ある。「私」「あなた」など、自分や相手を名前や役職・立場の代わりに指し示す名詞は存在するが、これらを名詞と区別する文法的な特徴は英語や中国語と比較して明確ではない。例えば英語ならば、一人称"I", 二人称"You", 三人称"He / She"は人称それ自体のための名詞であり、また、「修飾語-人称代詞」のように直接修飾語の修飾を受けることができないという特徴を持っている (clever person は成り立つが、*clever he は一般に非文である)。中国語もまた、一般に人称代詞は定語の修飾を受けないとされてきており、1922年の陳承沢《国文法草創》、1982年の朱德熙《語法講義》¹では人称代詞が名詞と異なる点について、定語の修飾を受けないこととしている²。

これら人称代名詞の直接的に修飾できないという特徴は、呂叔湘 (1955: pp. 184-185)³が述べているように、人称代詞自体が極めて確定的なものであり、描写や限定⁴がしにくいという基礎の上に成り立っているからであろう。そしてそれは英語も同じ理屈であると考えられる。しかし、鈴木 (1996: p.144) でいわれるように「相手依存の相対的自己規定の傾向が極めて広く見られる」日本語においては、人称代名詞、特に二人称や三人称は様々な語が人称代名詞の代わりとして用いることができる上に、待遇表現と深く結びついており、人称代名詞の定義自体がしにくい。その上、英語や中国語と異なり、現代においては直接連体修飾句の修飾を受け、いわゆる限定的修飾も描写的修飾もかなり自由に行うことができるという点では、名詞との間に明

¹ 朱德熙は「自己」なども人称代詞としてとっている。

² しかし、近年中国語では人称代詞を定語で修飾する例が増えてきており、小説などでは既に広く行われる構造となっている。

³ 加語有限制性和修飾性之分，三身代詞本身已經極其確定，無所用其限制，上面這些例句裏的加語都是修飾性的。

呂叔湘 (1955) 〈語法札記：五 三身代詞前有加語〉《漢語語法論文集》，科学出版社（原著初出1944-47）

⁴ 中国語においては、本来特に描写性修飾を受けにくかったと考えられる。

確な区別が存在しないと言っていいだろう。⁵鈴木孝夫(1973: p.78)では日本語の人称代名詞について「現代日本語には、grammatical な意味でも、notional な意味でも欠けているのは、一、二人称的範疇であって、所謂一、二人称と称せられる代名詞も実はすべて三人称なのである。つまり日本語には三人称のみがあつて、西欧的な意味での一、二人称は殆んど欠如していると言うことが出来る」と述べている。

先に、「中国語では一般に人称代詞は定語の修飾を受けない」と述べたが、五四時期以降、“落在這樣生疏的甚至還有些敵意的環境中的他們倆。(茅盾, 大沢郷)”のように、中国語でも人称代詞が定語の修飾を受ける例が増えてきた。会話でこのような長い修飾語を伴う表現をすることは比較的厳しいが、小説を主とする文章表現では、現在ではかなり広く用いられる。このような、「定語+人称代詞」構造に関して、「欧化」「日本語化」あるいはそのどちらでもなく中国語本来のものであるなどの意見があるが、管見によれば、中国語におけるこれら「定語+人称代詞」は日本語の「連体修飾句+人称代名詞」の影響を少なからず受けており、日本語からの翻訳の影響で多用されるようになったものであると考えられる。

だがここに日本語の「連体修飾句+人称代名詞」構造は、果たして日本語本来のものであろうかという疑問が生じる。確かに、人称代名詞が直接修飾できるというのは、日本語の人称代名詞を中国語や英語のそれと比較すると、特徴的ともいえるものであるが、周知の通り、日本語の「人称代名詞」は欧米語の翻訳から多用されるようになったものであり、性別によって三人称を分け、「カレ」「カノジョ」とするようになったのも欧米語の影響である⁶。

また、修飾関係については、森岡健二(2001: p. 34)では、「日本語には、固有名詞に修飾語をつけることは稀であるが、西欧語では種々の多様な修飾語が習慣的によく用いられる」として、大庭雪斎『訳和蘭文語』後編(1855)から、以下のように例を挙げている。

- (1) カラ強キ「フランケレイキ」 het magtige Frankrijk
- (2) 能ク貿易スル「ホルランド」 het handeldrijvend Holland
- (3) 人民多キ「アムステルダム」 het volkrijk Amsterdam
- (4) 善ナル「ピーテル」 de brave Pieter
- (5) 巧者ナル時計造り人 het kunstige uurwerkmaker

これを見ると、日本語の連体修飾関係も外国語の影響を受けて変化してきたと考えられる。それならば、日本語の「連体修飾語+人称代詞」構造も欧米語の影響により現れた可能性はな

⁵ 高橋太郎(1994: p.291)では、「一般に日本語の名詞を分類することは文法的に意味がない、といわれてきた」と述べている。

⁶ 『日本国語大辞典』(2001: p. 904) 第3巻では、「彼女(カノジョ)」が一語の代名詞として使われたのは明治20年頃であるが、一般に普及したのは大正以降としている。

いだろうか。あるいは、何らかの原因で現れた「新しい表現」なのではないだろうか。

しかし、筆者が調査を行ったところ、日本語において古くは『万葉集』に連体修飾を受ける人称代名詞とみられる例が存在することがわかった。本稿では、日中における人称代名詞を修飾する構造の研究の一環として、これら『万葉集』をはじめとする日本語の古典作品の中に見られる「連体修飾語+人称代名詞」について調査・分析を試みた。

—

1-1. 連体修飾語に関する先行研究

日本語における連体修飾の研究は枚挙に暇がない。大島資生（2010）、高橋太郎（1994: pp.277-433）、寺村秀夫（1992）などがある。特に寺村（1992）では、連体修飾部と被修飾語（底の名詞）との関係を「内の関係」「外の関係」の2種類に分けており、この考え方は現在広く知られている。やはり日本語の名詞分類に関して、さらにいえば人称代名詞の処置に関して、文法的な区別の問題が多いためか、特別人称代名詞を修飾する構造に関しては述べられていない。高橋（1994: p.291）では名詞の種類が連体修飾句の構文形式を要求する性質がある可能性について触れている。

古典文法に限っては、竹内美智子（1987）や、鍵本有理（1999）、佐伯梅友（1955a）（1955b）などに詳しい。鍵本（1999）では、「人称代名詞」の修飾として特別説明をしているわけではないが、「古代語においても連体修飾の例は多く見られるが、現代語以上に自由に連体修飾句が用いられているようである」として、『万葉集』当時の日本語連体修飾に関して、「和歌という定型に整えるためにやむなく使われたものもあろうが、現代語とは少し様相を異にするようである。論理的格関係が重視される現代語と違い、古代語では感性的表現、係り結びや喚体句が使われる。連体修飾句においても、現代語の論理をそのまま当てはめにくいものがある」と述べた上で、特徴的なものとして以下の例を挙げている。

1. 被修飾名詞が動詞の目的語に近いもの
例) 妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに（5・七九八）
2. 被修飾名詞が動詞の目的語とも主語ともとれるもの
例) 斯太の浦を朝漕ぐ舟はよしなしに漕ぐらめかもよよしこさるめ（14・三四三〇）
3. 被修飾名詞が再帰代名詞的なもの
例) 天地に少し至らぬますらをと思ひし我や男心もなき（12・二八七五）
（後略）

特に 3.に関しては注目すべきであろう。鍵本（1999）は、これらの構造について「（私が）

ますらおと思っている（あるいは「思っていた」）私自身」と解釈すると「我」は目的格であり、再帰代名詞として扱うことができる。また「（私を）ますらおと思っていた私」とすると「我」は「思う」に対する主格となる。（中略）主格と目的格を兼ねた、曖昧な言い方だが、古代語ではそれが許容されたのであろう。」としている。

連体修飾句を他の言語と比較した研究には、英語と比較したものに寺村（1993: pp.139-184）、日中と比較したものに孫維才（1990）、陳風（2009）、馬燕菁（2010）、楊凱榮（2011）、吳妍（2011）などがある。特に日中の「連体修飾語+人称代名詞」と“定語+人称代詞”を比較した研究は近年増えてきている。以前は、中国語の“定語+人称代詞”が欧米諸語の影響を受けた「欧化」語法だとして述べた研究はあったが、具体的に例を挙げて比較した研究は2000年代以降に集中している。しかし、日本語の古語における「連体修飾語+人称代名詞」構造を特別研究したものは管見の限りほとんど見当たらない。

1-2. 人称代名詞に関する先行研究

日本語の名詞を分類することは文法的には意味がないという意見があるという。しかしながら高橋（1994:p.291）で述べられているように、名詞はその種類によって連体修飾語句の構文形式を要求する性質があるとすれば、連体修飾句において、その被修飾語である名詞が人称代名詞かそうでないか見ることは、全く意味のないこととは断言できないと筆者は考える。

日本語における人称代名詞とは確かに規定しづらいものではあるが、しかしながら、たとえば現代語における「私」「あなた」「彼」「彼女」などの名詞、古語においては「われ」「なんじ」「きみ」などの名詞は、比較的待遇意識が排除された語であり、広く共通認識のある事物ではなく、もっぱら文脈に依存して表される事物であるという点で、「イヌ（吠える、動物、多くペットとして飼われる……といった比較的広い共通認識を持たれる）」や「リンゴ（赤（青）い、果物、木になる……といった比較的広い共通認識を持たれる）」などの一般名詞とは一線を画することができる名詞であろう。⁷

そこで今回は、日本語の第一人称代名詞及び第二人称代名詞を用いて、『万葉集』をはじめ『土佐日記』『枕草子』など古典文学作品に用いられている「連体修飾語+人称代名詞」構造について調査を行った。

『万葉集』の時代における人称代名詞に関しては、菊澤（1936）（1955）に詳しい。菊澤（1955）はまず「自称の代名詞」として「ア、アレ、ワ、ワレ、ワケ、マロ」を挙げ、「ア、アレ」と「ワ、

⁷ もっとも、「きみ」に関しては「目上の人に対する敬称」「天皇を表す」など、一般名詞的にも用いられることが多い。

ワレ」の相違について、「前者が単数的、孤独的（従って愛恋的）であり、後者は複数的、一般的である」（漢字は筆者が現代のものに改めた）としている。

アレが孤独的であり、ワレが複数的である事は、

アレをおきて、人はあらしとほころへど（五、八九二）

荒磯やに生ふる玉藻のうち靡き、ひとりや宿らむ、アを待ちかねて（一四、三五六二）

といふ前者に対して、

蘆原のしげこき小屋に菅畳、いやさやしきて、ワガふたり寝し（神武記）

ワガ中の産れ出たる、白玉の吾子古日は（五、九〇四）

といふ後者は、ヒトリ、フタリといふ語などによつて、よく対比せられると思はれる。

（下線筆者、原著は「\」で著される）

また、ア、ワと、レを伴つたアレ、ワレとの区別を考へて見ると、

ア、ワ	アレ
熟語となる	熟語とならない
「が」助詞を伴ふ	「が」助詞を伴はない
単独で主語とならない（又は稀になる）	単独で主語となる
連体語となる	連体語とならない

の様な対比が存する事が分る。

一般に、「ア」と「ワ」の使い分けは、時代的なものであるとされているが、菊澤（1955）ではこれを意味上の違いによるものであるとしている。

菊澤（1936）（1955）の説によれば、英語や中国語のような「個別の」比較的「人称代名詞」的特徴を持ったこの時期の日本語第一人称代名詞は、「ア」「アレ」であり、『万葉集』における「連体修飾語+第一人称代名詞」の用例を見るにも「ア」「アレ」を用いたほうが良いように考えられる。しかし「ア」「ワ」は版本によって異なることがある。例えば鹿持雅澄『万葉集古義』では「……吾大王乃。行幸能。山越風乃。独座。吾衣手爾。朝夕爾。還比奴礼婆。大夫登。念有我母。……（ワガオホキミノ イデマシノ ヤマコシノカゼノ ヒトリヲル アガコロモデモ アサヨヒニ カヘラヒメレバ マスヲト オモヘルアレモ）」（下線筆者、漢字は現代のものに改めた）とあるが、村木清一郎訳（1959）『万葉集』では「わが大王の 行幸の 山越すの風の ひとりをる わが衣手に 朝夕に 還らひぬれば ますらをと 思へるわれも」となっている。また、正宗敦夫（1929）『万葉集索引：単語篇』の訓は後者のものである。今回筆者が用いる訓は、主に村木（1959）及び、正宗敦夫（1929）のものであり、また訳文も村木（1959）に準じる。

また、このほか、福田(1959: p.244)では、「ア」系と「ワ」系の用法に関して、「アレ」「ワレ」などの「レ」は「後に附いたもので、附かない方が古形と思はれる。しかるに、東国歌においては、「あ」「わ」の用法が中央語と比して比較的自由である」としている。本稿では、「ア(アガ)」「アレ」及び「ワ(ワガ)」「ワレ」という「ア」系「ワ」系両方の代名詞を当時の第一人称代名詞として、例をとることとする。

第二人称に関しては、菊澤(1955: p.53-55)では、以下のように述べている。

対称の代名詞としては、ナ、ナレが基本的なもので、レの有無による相違は、ア、アレの場合に準じて考へられる。

ナが直接名詞と結合して熟語となる例には、ナセ(汝兄)、ナオト(汝弟)、ナネ(汝姉)、ナニモ(汝妹)、ナビト(汝人)などがある。後世、普通に代名詞の一つとして知られてゐる「なんぢ」は、この当時の熟語ナムチ(汝貴)であつたと思はれる。

(中略)

また、尊称の代名詞としては、ミマシ、イマシ、マシがある。ミマシは最もその高位のもので、イマシ、マシと簡略な音韻になるほど、尊敬の程度も薄らいで来てゐる。

(中略)

ナムチの反対にナビト(汝人)は卑称であつたらしい。

(中略)

更に軽蔑していふ代名詞には、オレ、イも行はれたのであつた。

(中略)

対称の代名詞に対して用ひられてゐる漢字は、(中略)日本書紀や萬葉集では、「爾、爾、乃、卿」などがあり、ナムチには汝、爾が当てられ、イマシには汝、爾、爾、卿、乃など多数用ひられてゐる。

反射代名詞の己が対称のナと訓まれる場合もある

(中略)

名詞のキミ(君)も代名詞的にしばしば用ひられ、名詞と代名詞の境界線はどこに引かれるかという問題が起こってくるのであるが、(後略)

この他、菊澤(1955)では、「他称の代名詞」として「定称」と「不定称」に分け、「定称」を「近称コ」「中称ソ」「遠称カ」系、「不定称」を「タ、タレ」「ナニ」等として単語を挙げているが、本稿ではこれら単語は省き、中国語“你”，英語“You”と比較するため、当時の「二人称代名詞」に当たる単語としては「ナ」及び「ナレ」を主とした「ナ」系名詞を基本に、現代でも二人称として用いられる「キミ」を扱いたい。「ナ」系熟語として挙げられている「ナセ」

「ナオト」などの名詞は扱わない。「キミ」に関しては、これが二人称的名詞である場合と、「大君」など天皇を指す場合、そして、目上の人を指す場合がある。「大君」を含め、目上の人を指しているのとれる場合は、例から除外した。

菊澤氏も述べているように、当時のこれら単語がいわゆる「第二人称代名詞」なのか単なる「名詞」なのかという問題もあり、そもそも英語や中国語の「第二人称代名詞」の枠に日本語の単語を当てはめることの問題もあるのだが、「人称代名詞を修飾する連体修飾構造」について例を集めることで、最終的には日本語の「人称代名詞」がどのような性格を持っているかについて一考を加えることができると筆者は考える。

三人称に関しては、李長波（2005）及び柳父章（1982）を参考に、今回用いた最も古い資料である『万葉集』の時代には「三人称」を定義することが難しいと考え、調査には用いなかった。万葉集に多く用いられる「わが背子」⁸「妹」のような用法は、二人称として捉えることもできるが、本稿ではこれらの単語は例として取らない。「わが君」「わが背の君」のような例は「君」の例として採用した。⁹

さらに、「修飾語＋人称代詞＋名詞」は、人称代詞の前置修飾語が人称代詞を修飾しているのか、人称代詞の後置名詞を修飾しているのか、あるいは「人称代名詞＋名詞」を修飾しているのか判別しづらい。そのため、このような構造は例から除外した。

『萬葉集索引：単語篇』を引くと、「ア」系の人称代名詞は「安，阿（ア）」「吾（ア）（アレ）（アガ）」「安我，安何，阿加（アガ）」「安連，安禮，阿例，阿禮（アレ）」など、「ワ」系の人称代名詞は「吾，和，己，余，我，妾，多（ワ）」「和我，己，吾，我，余，妾，朕，言，吾等，妻（ワガ）」「和例，和禮，我例，吾，我，余，妾，朕，言，吾等，子（ワレ）」など、「ナ」系の人称代名詞は「奈，柰，己，那，汝（ナ）」「己，汝，爾，奈我，奈何（ナガ）」「柰禮，汝（ナレ）」、「己，汝，爾（ナガ）」、「キミ」は「君，伎美，伎見，伎彌，吉美，吉民，枳美，岐美，公，々美，反，島，若（キミ）」などの漢字を用いている。「キミ」にも「ア」「ワ」「ナ」系と同じように、後ろに「ーガ」を伴った「君之（キミガ）」のような例がある。しかし「アガ」「ワガ」「ナガ」などは、「ガ」を伴う例がそのまま1つの漢字で著される例もあるが、「キミ」には2音語ということもあってか、それはないようである。

なお、今回は用例として参照にしたのは、主に村木清一郎訳（1959）『萬葉集』であるため、本稿で例に出す詩歌本文は現代のかな及び漢字に改められている。

⁸ 「せこ」は『日国』（第1版）においては名詞扱いされており、代名詞としては収録されていない。

⁹ 版本に依っては「妹」を「君」と書き換えているものもある。そのため、「君」だけを例として採った今回の調査は、『万葉集』における「人称代名詞」を用いた例としては不十分ではある。今回はあくまで「ア」「ワ」系、「キミ」系を用いた万葉集の「人称代名詞」の例を採取したに過ぎない。

二

2-1. 一人称代名詞が修飾を受ける用例数

『萬葉集総索引』中に「ア」を見出し語にする例は全96例（「安」80例，「阿」16例），「ワ」と表示された例は全211例（「和」144例，「己」2例，「余」1例，「吾」54例，「我」5例，「妾」1例，その他4例）存在する。なお，この中には「吾我」「阿我」などの例も含まれている。漢字1文字で「アガ」と記した例は「吾」のみで，「ワガを見よ」とある。「ワガ」として見出し語になっている例に関しては，計738例（「己」1例，「吾」594例，「我」115例，「余」11例，「妾」4例，「朕」3例，「言」5例，「吾等」4例，「妻」など1例）である。また，「アレ」「ワレ」を『萬葉集総索引』を用いて調べると，「アレ」は計44例（「安連」1例，「安禮」33例，「阿例」5例，「阿禮」5例），「ワレ」は計429例（「和例」6例，「和禮」53例，「我例」1例，「吾」301例，「我」46例，「余」4例，「妾」1例，「朕」1例，「言」4例，「吾等」9例，他3例）であり，これらを合計すると，『萬葉集』においては，少なくとも見積もっても，「ア」系の用例が140例存在し，「ワ」系の用例は，「ワガ」単独で見出し語を作る例も含むと1378例存在すると考えられる。

『萬葉集』計4516首¹⁰のうちに見られるこれら第一人称が修飾を受ける用例を調査したところ，計88例見つかった。うち，一人称「ワ」系を修飾する例は83例（「ワレ」79例，「ワガ」4例），「ア」系を修飾する例は5例（「アレ」4例「アガ」1例）であった。（図1）

図1：『萬葉集』における第一人称代名詞数と修飾を受ける用例

一人称代名詞	総数	修飾を受ける用例		
「ア」(含「アガ」)	95例	アガ1	5	88
「アレ」	44例	4		
「ワ」(含「ワガ」一部)	221例	0	83	
「ワガ」	738例	4		
「ワレ」	429例	79		

2-2. 二人称代名詞が修飾を受ける用例数

同じく『萬葉集総索引』を用いて二人称の用例を調べてみると，「ナ」「ナレ」「ナガ」は，『萬葉集総索引』中に「ナ」例32例（「奈」16例（含む「奈我（ナガ）」「奈何（ナガ）」），「奈」1例（「奈我」），「那」2例，「己」2例，「汝」11例），「ナレ」4例（「奈禮」1例，「汝」3例），「ナガ」23例（「己」1例，「汝」21例，「爾」1例）の計59例見られる。「キミ」の用例は，これが

¹⁰ 村木清一郎訳（1959）参照

名詞的に用いられることがかなり多いため、必然的に多くなる。全部で 712 例（「伎美」95 例、「伎見」1 例、「伎彌」4 例、「吉美」13 例、「吉民」3 例、「枳美」1 例、「岐美」1 例、「公」106 例、「君」484 例、「々美」1 例、「反」1 例、「島」1 例、「若」1 例）の使用が見られた。なお、これらの中には「君之」のような「ーガ」を伴う例も含んでいる。¹¹

これらの中から、「連体修飾語＋人称代名詞」構造を取る例は、以下の通り。まず、「ナ」系を修飾する例は管見の限り見つからなかった。「キミ」を修飾する例は 196 例¹²（「キミ」194 例、「キミラ」1 例、「ワガキミ」1 例）であった。（図 2）¹³

図 2：『万葉集』における第二人称代名詞数と修飾を受ける用例

二人称代名詞	総数	修飾を受ける用例		
「ナ」（含「ナガ」一部）	32 例	0	0	196
「ナレ」	4 例	0		
「ナガ」	23 例	0		
「キミ」（含む「キミーガ」）	484 例	196	196	

2-3. 各用例数の比較

今回の調査で、『万葉集』中に人称代名詞が修飾を受ける例は、第一人称が 88 例、第二人称が 196 例の計 284 例であった。

これらの結果を以降詳しく見ていこう。まずこの結果から、以下の 2 点が注目される。

1. 第一人称「ア」系と「ワ」系を比べると圧倒的に（約 11 倍）「ワ」系が連体修飾を受ける例が多いということ。
2. 第二人称「ナ」系が修飾を受ける例がないということ。

まず、1. に関していうと、菊澤（1936）で「単数的、孤独的（従って愛恋的）」といわれる「ア」系が修飾を受ける例が少なく、「複数的、一般的」といわれる「ワ」系が修飾を受ける例が多い

¹¹ 『萬葉集総索引』で格助詞「ガ」は「[い] 体言に対しての連体語を示すもの。」「[ろ] 体言に属して、用言に対しての主語たるを示すもの。」「[は] 体言に属して、其が補助成分たることを示すもの」のように分類し、これにあたる様々な漢字を挙げている。例えば「我」「之」などの漢字は [い] [ろ] [は] 全ての意味があるとしているが、しかし特に漢字「君」を使った「キミ」の後置格助詞には多く「之」がくるようである。統計をとったわけではないので、メモ書き程度に留める。

¹² うち 9 例は、「汝兄の君」「わが夫の君」「わが背の君」(5)「わが君」(2) である。これらは繋がりが強く、1 つの語句としてとることもできる上、今回人稱として例にとらなかった「わが背子」と意味的にはほとんど同じ語句であると言える。

¹³ 今回助詞「ガ」を直後に伴う例は「ーガ」として例をとっている。

ということは大変興味深い結果である。この理由としては、もちろん「ア」系の用例の絶対数が「ワ」系と比較して少ないためということも考えられよう。『万葉集総索引』中の「ワ」系用例は、「ア」系用例の約10倍もあり、これは『万葉集』における「連体修飾語＋第一人称代名詞」の用例中、「ワ」系の用例が「ア」系の約11倍であることと比較すると、さほど特筆すべき特徴とはいえないかもしれない。だが、「アレ」「ワレ」に限って言えば、「アレ」の総数44例、「ワレ」の総数429例のうち、「連体修飾語＋人称代名詞」の構造を取る例は「アレ」4例、「ワレ」79例であり、この比率から見ると、「アレ」が「ワレ」より連体修飾語を受けにくい語であるという可能性は高い。

菊澤(1955)では、「単数的、孤立的」な「ア」と「複数的、一般的」な「ワ」の例は以下の様な例に対比されるとしている。

アレをおきて、人はあらじとほころへど(五、八九二)

荒磯やに生ふる玉藻のうち靡き、ひとりや宿らむ、アを待ちかねて(一四、三五六二)

蘆原のしげこき小屋に萱畳、いやさやしきて、ワガふたり寝し(神武記)

ワガ中の産れ出たる、白玉の吾子古日は(五、九〇四)

(下線筆者、原著は「\」で著される)

言い換えれば、「ア」は定であり、「ワ」は不定であるとも言えるであろう。定はすなわち、比較的「確定的であり、描写や限定がしにくい」ものと考えられ、不定である「ワ」よりも、定である「ア」が修飾を受けにくいというのは、英語や中国語の人称代名詞が修飾を受けにくい理由と同じと考えられる。

さらに、「ナ」系を用いた例がないということに関してだが、これも熟考してみる価値がある。

「ナ」「ナレ」「ナガ」という「ナ」系の名詞は、『万葉集』中に59例の用例があったが、うち「連体修飾語＋人称代名詞」は1例もみられない。これとは別に、今回二人称としてとった、「キミ」「キミガ」が修飾を受ける用例は、かなり多い。『万葉集』に「キミ」「キミガ」は総数484例認められ、うち196例が修飾を受けていたが、これは最初に述べたように、「キミ」「キミガ」は、代名詞的に用いられることもあるとはいえ、本来的には名詞であることが関係しているのではないだろうか。実際、今回修飾を受ける例として拾った196例のうちにも、「キミ」が人称代名詞なのか名詞的に用いているのか、判別しづらい例は幾つもある。そもそも「キミ」と「ナ」は由来からして異なっており、「キミ」がもともと目上の人物という広いもの(あるいはソトの事物)を指すのと比べ、「ナ」は「ナセ」「ナギモ」などの言葉があることから推測するに、本来は自称(且つウチの事物を指す語)であると考えられる。つまり「ナ」系の名詞は「キミ」よりも、より狭い範囲の、より個別的なものをさす単語であったことが、修飾を受け

にくい原因ではないだろうか。

もし「キミ」を人称代名詞として認めなかった場合、「ナ」系自体の用例が少ないため、一人称代名詞と比較して二人称代名詞が修飾を受けにくいかどうかをここで言及するのは避けたい。しかし、今回『万葉集』における全ての連体修飾構造を調べたわけではないが、全 4516 首中、「キミ」「キミガ」を抜けば「連体修飾語+人称代名詞」構造は一人称を修飾する 88 例のみである。「キミ」「キミガ」が修飾語を受ける用例のみで 196 例あること（更に今回「名詞」として扱った「キミ」を含めるともっと用例が増える）と比較すると、少なくとも、当時の日本語は「個別的なものを指す単語は修飾を受けづらい」という性格を持っていた可能性が示唆される。

三

3-1. 一人称「ア」の修飾語

今回『万葉集』中において修飾をうける一人称代名詞全 88 例のなかでは、「アレ」「ワレ」のように「レ」を伴った例は、「ア」系に 4 例「ワ」系に 79 例と、それぞれの中で最も多い用例があった。「ア」系と「ワ」系で分けて考えると、全「ア」系 5 例がうける修飾語は、以下の通りである。用例が少ないことから断言はできないが、管見の限り「ワ」系を修飾する修飾語と大きな差異はないようである。

- (6) わが旅は 久しくあらし この吾が着る 妹が衣の 垢つく見れば (3667 番)
 (おれの旅は 長くなったか いま着てる 妻の着物に 垢がついたよ)
- (7) 里近く 君がなりなば 恋ひめやと もとな思ひし 吾ぞくやしき (3939 番)
 (里近く 君が来るなら 恋うまいと 軽く考えた わたしはくやしい)
- (8) わが背子に 恋ひすべなかり (葦垣の) ほかに嘆かふ 吾し悲しも (3975 番)
 (わけもなく 友が恋しい よそにいて 離れて嘆く おれは悲しい)
- (9) …… (若草の) 脚結手装り (群鳥の) 朝立ち去なば おくれたる 吾や悲しき
 旅に行く 君かも恋ひむ…… (4008 番)
 (……もし君が 旅装いして 朝早く 立って行くなら あとに残る おれはどう
 する 旅に行く 君恋しきは……)
- (10) わが妻も 絵に描き取らむ 暇もが 旅ゆく吾は 見つつ偲はむ (4327 番・「右の一
 首は、長下の郡の物部古麿」とあり。)
 (女房を 絵にかくひまが あればよい 旅するおれは 見つつ思おう)

これは、菊澤 (1936) で挙げられている「ア」「ワ」に後置する体言の性質が多くそれぞれ異なった性質を持っていることと比較すると、特徴と言えるものかもしれないが、どちらにして

も「ア」系の例が5例のみであることから断言することは難しい。また、後で述べるが、(7)や(10)のように「思ひし」や「旅ゆく」を伴った例は「ワ」系にも非常に多い。

「ア」系を修飾する修飾語の性質は、「思ひし」「旅ゆく」など動詞性のものが4例とほとんどを占め、残りの1例は(6)の例「この」という代名詞が修飾する用例であった。

3-2. 一人称「ワ」の修飾語

「ワ」系の人称代名詞が修飾を受ける例は、全部で83例(「ワレ」79例、「ワガ」4例)であり、そのほとんどが「ワレ」を修飾している。「ワガ」が少ないのは、「修飾語+人称代名詞+名詞」と取ることができる例は「連体修飾語+人称代名詞」の用例から省いたことも関係している。

「ワ」系を修飾する修飾語の性質は、動詞性の修飾語が最も多く72例、ついで名詞性の修飾語が7例、形容詞性の修飾語が4例であった。

「ワ」系を修飾する語に多いのは、多い順に以下のとおりである。

A) 移動を表す例(補助動詞の用例は除く): 21例

「旅ゆく」(4)「行く」(4)「行きし」「行かぬ」「出でて来し」「出で立つ」「船出す」
「帰しし」「通ふ」「見に来し」(2)「来し」(2)「来む」「渡る」

B) 「思う」系: 13例

「思へる」(7)「思ひてありし」「思ひき」「思はぬ」「思ふ」「思はじ」「思ひし」

C) 「待つ」系: 9例

「待つ」(8)「時待つ」

D) 「人」系: 7例

「人なる」(2)「世の人」(2)「世のひと」「たわや女」「丈夫」

E) 「留」系: 4例

「留れる」(2)「留まれる」「とどまれる」

F) 「恋」「愛」系: 3例

「恋ふる」「恋ひむ」「恋ひ来し」

G) 「あう」「みる」系: 2例

「見る」「逢ふこともあらむ」

この他の例はすべて1例ずつしか現れない。

特に「移動を表す」例、「思う」系の例、「待つ」の例は大変多く、これらだけで「ワ」系が修飾を受ける例の半数以上を占める。

しかし、これらの特徴は、「ワ」系(「思ひし」「旅ゆく」などは「ア」系も伴う)に限ったこ

とではなく、「キミ」にも同じ特徴がある。これらの例を詳しく分析するまえに、「キミ」についても見てみよう。

3-3. 二人称「キミ」の修飾語

「キミ」あるいは「キミガ」が修飾を受ける例は、全部で 196 例ある。うち、動詞・動詞的な連語を修飾語とする例が 170 例、形容詞及び形容詞的な連語を修飾語とする例が 13 例、名詞及び名詞的な連語の飾語を持つ例が 11 例、加えて「この」という代名詞が修飾する例が 2 例であった。

「キミ」を修飾する語に多いのは多い順に以下の通り。見て分かるように、「ワ」系と同じ例が多く存在する。

A) 移動を表す例（補助動詞の用例は除く）：36 例

「旅ゆく」(8)「旅に往にし」「旅往にし」「旅なる」「旅に行く」「こぎ行く」「行きし」
 (2) 「行く」(3) 「行きけむ」「往にし」「去にし」「来ます」「来まさぬ」(4)「来ざりし」「(言)先立てし」「通ふ」「通ひし」(2) 「通はしし」「越えにし」「越ゆらむ」(2)「越えむとする」

B) 「思う」系：32 例

「思へる」(6)「思ひたのみし」「思ひたのめる」「思ほゆる」(2)「思ふ」(16)「思ひし」(2)「思ひ過ぐべき」「思はぬ」「思ほえし」「思はずあるらむ」

C) 「あう」「みる」系：18 例

「見飽かぬ」「見し」(2) 「見ぬ」「見えぬ」(2)「逢へりし」「逢へる」(4)「会へる」「逢ひたる」「逢ひがたき」「逢はぬ」(4)

D) 「恋」「愛」系：10 例

「恋ふる」(2)「恋ひし」(4)「恋ひ来し」「恋ひふらむ」「愛しきやし」「愛しきよし」

E) 「眠る」系：9 例

「伏す」「臥せる」(2)「臥やせる」「寝なむ」「宿りする」(2)「宿りぬる」「宿れる」

F) 「待つ」系：9 例

「待つ」(8)「待つらむ」

G) 要求、願望を表す例：7 例

「見まくほしき」(2)「見まくの欲しき」(2)「見まくのほしき」(2)「目が欲る」

「ワ」系「ア」系と同じく、「移動を表す」例と「思う」系の例が非常に多いことが分かる。さらに「あう」「みる」系の例、「恋」「愛」系の例、「待つ」系の例が多いことも、同じである。

なお、「思う」系と「恋」「愛」系は一人称・二人称問わず、一部意味的に重なるところもある。「愛しきやし」「愛しきよし」は「キミ」にかかる枕詞なので、純粋な連体修飾句かという疑問が残るだろう。また、「キミ」「キミガ」を修飾する語に「要求、願望を表す」例としてとられている例は、すべてが「あう」「みる」系の動詞を用いていることから、これらは「あう」「みる」系の例をとまとめてもよいであろう。

また、「キミ」「キミガ」の例には、「寝せる」「宿りする」「臥せる」など「眠る」系の語で修飾される例が9例あるが、この例はほとんどが挽歌であり、また同時期に読まれたことから同じような単語が用いられた可能性が高い。3首(3688番, 3689番, 3693番)が「老岐の島に着いた時、雪連宅満が急に恐ろしい病にかかって死んだ。そのとき作った歌一首と短歌」とあり、同じく読まれたものと考えられる。また、「臥せる」「臥やせる」の語を伴う3首(3339番, 3341番, 3342番)も「或本の歌 備後の国の神島の浜で、調使音が、死骸を見て作った歌一首と短歌」とあり、同じく読まれたものであろう。それ以外の1首(222番)も挽歌であり、残りの2首が「睡眠する」の意味で使われている。

四

4-1. 一人称と二人称の修飾語の比較

『万葉集』において、人称代名詞を修飾する連体修飾語を「ワ」系と「キミ」「キミガ」で比較すると、「ワ」系に複数例あった「人」系、すなわち人を表す単語を以って人称代名詞を修飾するような例が、「キミ」「キミガ」には現れない。ここでいう「人」系の修飾語とは、人を表す名詞が人称代名詞にかかり、その人称代名詞が持つ特性を描写する例である。

二人称代名詞「キミ」「キミガ」には、「わが夫の君」(59番)、「わが背の君」(286番, 1020-1021番, 4006番, 4010番, 4245番)、「愛子汝兄の君」(3885番)、「わが君」(552番, 660番)のような例はあるが、これらはすべて修飾語と被修飾語の所有・所属関係を表すものであり、両者の結びつきは非常に強い。「ワ」系が「人」系の語句で修飾される例は、これとは異なり、「～であるところの私」という被修飾語の性質・状態を描写しているのである。このような例は全7例存在し、「ワ」系を修飾する名詞性修飾語は全てこの修飾関係を示す(「ア」系に代名詞を除く名詞性の修飾語を持つ例はない)。

(11) うつそみの 人なるわれ¹⁴や 明日よりは 二上山を 弟とわが見む (165番)

¹⁴ 「人なるわれ」は、「なる」を動詞的に捉えれば、これは動詞性の修飾語といえる。しかし、「名詞性の語句+なる+人稱代名詞」の構造は、「キミ」系では「さ青なる」「旅なる」の語しか伴わず、「～として生まれた」のように名詞で以って「キミ」を修飾する例はない。

- (なま身をもつ 人のわたしが 明日からは 二上山を 弟と思おう)
- (12) 卷向の 山べ響みて ゆく水の水沫みなわの如し 世の人われは (1269 番・「柿本朝臣人麿の歌集に出ている」とあり)
- (巻向の 山をとよもし 行く水の 水泡のようだ 生身のおれら)
- (13) …… (あしひきの) 山鳥こそは 峰向ひに 妻問すといへ (うつせみの) 人なるわれや 何すとか 一日一夜も 離りゐて 嘆き恋ふらむ …… (1629 番)
- (奥山の 山鳥こそは 山向いに 妻をたずねる 人の身を 持った自分は 何のため ひと日ひと夜も 君に離れ 恋いこがれるか……)
- (14) 年毎に 梅は咲けども (うつせみの) 世のひと吾し 春なかりけり (1857 番)
- (春ごとに 梅は花咲く それなのに 世の人おれに 春はなかった)
- (15) ひぐらしは 時と鳴けども 君に恋ひ たわや女われは 時わかず泣く (1982 番)
- (ひぐらしは 夕ぐれに鳴く 君に恋い 女のわたしは 時もなく泣く)
- (16) 大王の 任のまにまに (しなざかる) 越を治めに 出でて来し 丈夫われすら
世の中の 常しなければ…… (3969 番)
- (大君の 仰せのままに 遠国の 越を治めに 立って来た 勇士のおれも 世の中の はかない習い……)
- (17) ……なにしかも 秋にしあらねば 言問の ともしき子ら うつせみの 世の人われも ここをしも あやに奇しみ…… (4125 番)
- (なにゆえに 秋にならぬと 逢うことが できぬのだろう 生身持つ 世の人おれも その点が いやに不思議で……)

こういった被修飾語の性質・状態を表す例は「キミ」「キミガ」の用例には現れない。二人称「キミ」系の語を修飾する名詞性の修飾語は全 11 例存在するが、その用例は先ほど挙げた「所有・所属関係」を表すものがほとんどで、8 例。残りの 2 例は「場所」を表す用例である。

所有・所属関係

- (18) 流らふる 雪吹く風の 寒き夜に わが夫の君は ひとりか寝らむ (52 番・「誉謝女王がよまれた歌」とあり)
- (吹きに吹く 吹雪の風の 寒い夜に わたしの人は ひとり寝られるか)
- (19) よろしなべ わが背の君が 負ひ来にし この背の山を 妹とは呼ばじ (286 番)
- (都合よく 君とおんなじ 背という名 この背の山だ 妹とは呼ぶまい)
- (20) わが君は 戯奴をば死ねと 思へかも 逢ふ夜逢はぬ夜 ふたつ行くらむ (552 番・「大伴宿禰三依の歌」とあり)

- (君がおれを こいつめ死ねと 思うゆえ 逢う夜逢わぬ夜 ふたつあるだろう)
- (21) 汝をと吾を 人そ放くなる いでわが君 人の中言 聞きこすなゆめ (660番・「大伴坂上郎女の歌」とある)
- (わたしらの 仲をさくため するそうよ 中傷に耳を おかしなさるな)
- (22)(愛しきよし) わが背の君を朝さらず 逢ひて言問ひ 夕されば 手たづさはりて..... (4006番)
- (.....親しい友に 朝ごとに 逢って語って 夕ごとに 手を取り合った.....)
- (23) うら恋し わが背の君は なでしこが 花にもがもな 朝な朝な見む (4010)
- (慕わしい この友だちが なでしこの 花であったら 朝ごとに見ように)
- (24) (そらみつ) 大和の国 (あおによし) 奈良の都ゆ (押し照る) 難波に下り住吉の 三津に船乗り 直渡り 日の入る国に 遣さる わが背の君を かけまくの ゆゆしかしこき..... (4245番・「天平五年、入唐使に贈った歌一首と短歌 作者不明」とあり)
- (ふるさとの 大和の国の 君います 奈良の宮から 海ぎしの 難波にくだり住吉の 三津の浜から まっすぐに 日の入る国に 使用する この友たちを 申すのも はばかりあるが.....)
- (25) 大王の 御言かしこみ (さし並ぶ) 国に出でますや わが背の君を かけまくも ゆゆし畏し..... (1020-1021番・「石上乙麿卿が土佐の国に流された時の歌三首と短歌」とあり)
- (大君の 仰せのままに 遠々と 土佐に行かれる わたしの人を 申すのも はばかりけれど)

場所

- (26) 愛しきやし 遠からぬ里の 君来むと 大野びにかも 月の照りたる (986番・「湯原王の月の歌」とあり)
- (月が照る いとしい君の 来るしるし 大野の原に 月が照りわたる)
- (27)さし並ぶ となりの君は あらかじめ 自妻離れて 請はなくに 鍵さへ奉る..... (1738番・「上総の周淮の珠名の娘子をよんだ歌一首と短歌」とあり)
- (.....家並びの となりの人は あらかじめ 妻を追い出し 鍵までも 任せておった.....)
- (28) (しなごかる) 越の君らと 斯くしこそ 柳かづらき 楽しく遊ばめ (4071番・「右は、郡の役人をはじめ、その子弟まで多く会に集まった時、守大伴宿祢家持が作った

歌」とあり)

(越の国の君らと常に このように 柳かざして 楽しく遊ぼう)

つまり、例えば、「世の人キミ」や「丈夫キミ」のように、「キミ」は名詞性の修飾語で修飾して、「キミ」の性質や状態を描写することはしにくかった、あるいはできなかった可能性がある。

4-2. 人称代名詞の格

また、これと関連して、特に「キミ」系の二人称代名詞を修飾するような表現方法は、代名詞は主格ではなく目的格であり、別の主語に当たる語(ほとんどの場合歌の読み手である「我」)が暗に、あるいは明確に示されていることが多い。

(29) (三崎廻の 荒磯に寄する 五百重波) 立ちても居ても わが思へる君 (568 番・「太宰帥大伴旅人卿が、大納言に任ぜられ、都に入ろうとした時に、太宰府の官人らが卿を筑前国の蘆城の駅家で餞した歌」とあり)

(三崎への 磯うちかえし 立つ波だ 立ってもいても 恋しい君だ)

(30) (君が家の 池の白波 磯に寄せ) しばしば見とも 飽かむ君かも (4503 番・「右の一首は、右中弁大伴宿祢家持」とあり)

(君の池の 波はしばしば 磯に寄る しばしば見ても 見飽きない君)

(29) のような例は、「わが思へる君」と主語が入っているのでわかりやすいが、(30) のような例も、「しばしば見とも (わが) 飽かむ君」と解釈され、これは「君が見飽きない」のではなく、意味としては「わたしが君を見飽きない」とするのが自然であろう。「キミ」は主格ではなく目的格である。

このような指摘は先行研究に既にあって、鍵本(1999)では、『万葉集』では主格か目的格(対格)か分かりにくい例が、特に心理動詞の場合は多いとしている。「離れ居て 朝嘆く君」のような例は、「君が朝嘆く」のではなく、「(私が) 朝嘆く君」のであり、「舟の梶取る間なく思ほえし君」のような例も「君が思う」のではなく「(私が) 思う君」のように、主語「我」に当たる単語が省略されているとしている。鍵本(1999)によれば、「思ほゆ」はその動詞自体が「時枝誠記のいう「対象格」的なものを要求する」動詞なのである。氏は「主格と目的格の両方が想定される場合は主格の方が優先される傾向があったのではないか」として、「白菅之真野乃棗原心従毛不念吾之衣爾措(しらすげの まののりはら こころゆも おもはぬわれし ころもにすりつ)」(原文ママ)(7・一三五四)の例をあげ、これは原本に「吾」とあった箇所が後に「君」へと意改された可能性が高いとしている。

管見によれば、『万葉集』において人称代名詞を修飾する構造は、その修飾語に「思う」系や「恋」「愛」系の動詞のように、心理動詞が用いられる用例が多いため、二人称代名詞「キミ」を修飾する時、その多くが「キミ」を目的格的に扱っているものと考えられる。

主格か目的格か曖昧なものも多いので、断言するのは難しいが、筆者の調査では、二人称「キミ」系を目的格に解すことのできる例は、88例あって、その修飾語は以下の通りである。鍵本(1999)の指摘するように、多くが心理動詞である。

「逢へる」「見し」「見まくの欲しき」「見まくのほしき」(2)「目が欲る」「見まくの欲しき」「見まくほしき」(2)「見飽かぬ」「見えぬ」(2)「見し」「見ぬ」「逢ひがたき」「逢ひたる」「逢へる」(3)「逢はぬ」(4)「逢へりし」「会へる」「思ふ」(16)「思へる」(6)「思ほえし」「思ひし」(2)「思はぬ」「思はずあるらむ」「思ひたのめる」「思ひ過ぐべき」「思ひたのみし」「思ほゆる」(2)「奉れる」「飽かぬ」「飽かざる」(2)「飽かむ」「面知る」「いぶせき」「惜しかる」「通ふ」「恋ひ来し」「恋ひし」(4)「恋ふる」(2)「恋ふらむ」「たのめたる」「照らせる」「待つ」(8)「よそふる」「愛しきやし」「愛しきよし」「馴れにし」

これと比較して、一人称「ワ」系が目的格に取ることのできる用例はわずか4例のみしか現れず、さらにうち2408番と2808番はほぼ同じものであるため、実質的には3例のみしかないといい。なお「ア」系にこのような用例はなかった。

(31) わが大王 物な思ほし 皇神の 嗣ぎて賜へる われ無けなくに (77番・「御姉御名部皇女が唱和し申上げた歌」とあり)

(大君よ 嘆きなさるな 補佐役に 神の定めた わたしもいます)

(32) 眉根搔き 鼻ひ紐解け 待つらむか いつかも見むと 思へるわれを (2408番)

(帯どけし くさめし眉かき 待てるか いつ逢えるかと 思うおれをさ)

(33) 眉根搔き 鼻ひ紐解け 待てりやも いつかも見むと 恋ひ来しわれを (2808番・右は上(2408)に柿本朝臣人麿の歌のなかに見えている。但し、問答であるから重ねてここに載せておく)とあり。)

(紐解けし くしゃみし眉搔き 待ったのか いつ逢えるかと こがれたおれを)

(34) 命あらば 逢ふこともあらむ わがゆゑに はたな思ひそ 命だに経ば (3745番)

(生きていたら 逢うこともあろう わたしゆえ そうこがれるな 死んでくださるな)

つまり、『万葉集』において修飾を受ける二人称代名詞「キミ」は一人称代名詞と比較して目的格的に使われることが多いといえる。

4-3. 修飾語の性質

『万葉集』中の「連体修飾語+人称代名詞」構造において、他に注目すべきなのは、万葉集に現れるこれらの人称代詞を修飾する修飾句が、ほとんど動詞性のものであるということである。動詞性の修飾は、連語「(さ) 丹つらふ」4例を含む246例。動詞性ではない修飾句は、名詞性（代名詞「コ」3例、連語「愛しきやし遠からぬ里の君来むと……（986番）」を含む）21例、形容詞性（連語「愛しきやし」「愛しきよし」を含む）17例であり、『万葉集』における人称代名詞「ワ」系「ア」系「キミ」系を修飾する句は動詞性>名詞性>形容詞性の順になることが分かる。なおこれは、筆者が小説39作品を用いて行った1906~1928年間の日本語における「連体修飾語+人称代名詞」構造の使用調査と同じである。名詞性と形容詞性の連体修飾語の量の差異はともかく、動詞性の連体修飾句が際立って多いことは明らかである。筆者は『万葉集』全てにおける連体修飾構造について調査したわけではないので断言することは避けるが、おそらくこれは『万葉集』における「連体修飾句+人称代名詞」の構造の特徴というよりも、日本語の連体修飾構造全体の特徴である可能性が高い。

おわりに

以上、『万葉集』における「連体修飾語+人称代名詞」の構造を見てきたが、結果をまとめると以下の様な特徴があるといえるだろう。

- A) 当時の日本語は「個別的なものを指す単語は修飾を受けづらい」という性格を持っていた可能性がある。また、第二人称「ナ」系が修飾を受ける例はない。
- B) 当時の「連体修飾語+人称代名詞」構造に用いられる修飾語は、「移動を表す」例と「思う」系の例、「あう」「みる」系の例、「恋」「愛」系の例、「待つ」系の例が多い。
- C) 「ワ」系が代名詞を除く名詞性の修飾語で修飾される時、修飾語は被修飾語の性質・状態を描写する。「キミ」系が名詞性の修飾語で修飾される時、修飾語は被修飾語との所有・所属関係あるいは場所関係を表す。名詞性の修飾語が「キミ」を修飾するとき、被修飾語の性質・状態を描写することは難しいかあるいはできなかった可能性がある。
- D) 『万葉集』において修飾を受ける二人称代名詞「キミ」は一人称代名詞と比較して目的格になることが多い。
- E) 『万葉集』に現れる人称代名詞を修飾する語は、多くが動詞性のものであり、ついで名詞性、形容詞性のものである。この順番は近代における「連体修飾語+人称代名詞」構造の修飾語の性質と同じである。

また、『万葉集』には多くの倒置法が用いられており、これらは事物を強調、あるいは取り立てるニュアンスがある。また、これら倒置法は係り結びとよく併用されている。大野晋（1993: p.339）では、倒置法によって係り結びが生まれたとしている。¹⁵

(35) 春山の 友うぐひすの 鳴き別れ 帰ります間も 思ほせわれを (1890 番)

(春山の うぐいすどもの 泣き別れ 別れ帰っても お思ってください)

(36) (斑鳩の 因可の池の) よろしくも 君を言はねば 思ひぞわがする (3020 番)

(斑鳩の 因可の人の よく言わぬ 君のことでも わたし恋しい)

(37) (あしひきの 山菅の根の) 懇ろに われはぞ恋ふる 君が姿に (3051 番)

(山菅の 根のねんごろに 心から 恋いこがれるよ 君のすがたに)

特に (37) は、「ぞ」の係り結びによって「恋ふる」が連体形になっているため、「君」を修飾する語句と紛らわしい。『万葉集』におけるこれらの倒置法と係り結びが「連体修飾語+人称代名詞」に関係している可能性は大いに考えられる。

しかしながら、「連体修飾語+人称代名詞」の構造が、当時日常的に使われていたかどうかに関しては、この結果をもって断言することは難しい。というのも、『万葉集』は和歌集であり、語数の制約や、修辭的意図の強い性質を持っているからである。「連体修飾語+人称代名詞」構造が倒置法のような修辭的意図で使用されていたのだとすれば、これを以って当時の日本語に人称代名詞を修飾する構造が一般的に使用されていたとは断言できない。

現に、筆者は『土佐日記』『枕草子』『源氏物語』における「連体修飾語+人称代名詞」の用例も調査してみたが、このような用例は極めて少なく、また、用例があったとしても歌のなかで現れることがほとんどであった。

(38) ゆくさきに たつしらなみの こゑよりも おくれてなかむ われやまさらむ (『土佐日記』1月7日¹⁶)

(行くさきに立つ白波の声よりも遅れて泣かむわれやまさらむ (お船の進むさきざきで、立つ白波の音よりも、あとに残され泣くだろう、私の声が大きかる))

(39) かげみれば なみのそこなる ひさかたの そらこぎわたる われぞわびしき (『土佐日記』1月17日)

(影見れば波の底なる久方の空漕ぎわたるわれぞわびしき (見ずに映る影をみたら、

¹⁵ 「ゾ・ナム・ヤ・カは本来文末にあったのだが、それが強調のための倒置によって文中に進出し、本来の題目の部分で文末に位置するようになった。題目であった部分は、当然名詞、または名詞句 (連体形) であったわけで、それが文末に位置して、上にあるゾ・ナム・ヤ・カと呼応するという係り結びがそこに成立した。」

¹⁶ 萩谷朴 (1967) 『土佐日記全注釈』 (角川書店, p.129) 訳文、底本は本書参照。

波の底にも大空がある。その涯てしない太虚を漕いでゆく人間の私、何とちっぽけな、あわれな存在であることか)

(40) 元輔が後と言はるる君しもや今宵の歌にはづれては居る (『枕草子』95段)¹⁷

(41) 「若き人といひながら、心幼くものしたまひけるを知らで、いかに人並にと、思ひける我こそ、まさりてはかなかりけれ」とて、御乳母どもをさひなみ、のたまふに、聞こえん方なし。(少女、陽明文庫蔵底本)¹⁸

(38) (39) はいずれも歌であり、(40) もこの一文のみを書いたものであり、歌のようなものである。(41) だけは台詞であるが、「連体修飾語+人称代名詞」が『土佐日記』『枕草子』『源氏物語』中にこの一箇所のみ使用となると、本構造は日常的に使用されていたとはいえないであろう。また、(41) の例も、修飾語は「思ひける」を用いていること、そして係り結びを使用していることをみると、『万葉集』で用いられていた「連体修飾語+人称代名詞」と同じ性質であると推測される。当時の「連体修飾語+人称代名詞」は現代のものとは比べて制限のあるものであったといえよう。

明治時代の欧米語からの翻訳文と、その原文を比較してみると、日本語翻訳文章で、自発的に「連体修飾語+人称代詞」構造を用いていることが明らかになる。また、これらの文章には日本語から重視した中国語翻訳文もあるので、付記する。

(42) 斯くて男女一同は二週間の後船に乗りサンタウンに向て飛行せり。発見に富める彼等の快樂や如何ならむ。(徳富蘆花訳 (1891: p. 33) 「世界の末日」『国民之友』, 120号, 民友社)¹⁹

A fortnight after their arrival, the explorers, rich in their discovery, embarked on their aerial flotilla and set sail for Suntown. The resurrection of humanity was assured. What a triumph and what rejoicing on their return! (Flammarion, C. (1891: p. 567). “The Last Days of the Earth,” *The Contemporary Review*, April. Leonard Scott Publication Company.)

於是淹留半月。男女相握以向桑達文。彼等探險隊得此美滿之發明。其愉快何如哉。(飲氷訳 (1902: p. 12) 〈世紀末日記〉《新小説》, 第1号)

(43) 齊しく同郷の黒人に生れ、齊しく異域の奴隷に売られながら、エドウア、ドが家に養

¹⁷ 増田茂夫校注 (1987) 『枕草子』和泉書院, p.96 底本は本書参照。なお、この箇所は中宮が書いてよこした文である。

¹⁸ 『源氏物語』(源氏物語別本集成刊行会編 (2008: pp. 514-515) 『源氏物語別本集成続』, 第5巻, おうふう)。底本は源氏物語(陽明文庫蔵)。「連体修飾語+人称代名詞」構造の箇所は、ほとんどの版本で上記の構造をとっているが、穂久瀨文庫本のみ「～思けるわか心こそ」となっている。

¹⁹ 今回は明治文献資料刊行会編の複製を使用。

はるゝ彼等を視よ。(尾崎紅葉訳 (1893: p. 384) 「狭黒児」)

The wretched slaves upon his plantation thought themselves still more unfortunate *when they compared their condition with that of the negroes on the estate of Mr. Edwards.* (Edgeworth, M. (1802: p. 232).²⁰ “The grateful Negro,” *Popular Tales*, Vol. 2, 1832, Printed for Baldwin and Cradock.)

你瞧。一樣生長在同郷的黒人。一樣売做異域的奴隸。那鄰家愛德華家中養下的奴隸。

(吳禱訳 (1906a: p. 1) 〈短編小説 狭男奴〉《東方雜誌》，第 3 年第 1 期)²¹

- (44) シイザアは怒れる気色も無く、益言葉を和げて、「なるほど、お前の理屈も至当だ。至当には違ねえが、私のいふ言だつて、万更無理でもあるめえぢやねえか。毛唐人に裏斬をしたと、当人でねえお前だから、それはさうと想はうけれど、我はまさかに其位の甘口に乗せられるほど、脆い男でもねえ積りだ。然し此処で今更愚痴をいつた所が、始まらねえ話だから、もう一言ふめえ。ヘクトル、おいヘクトル、狸寝入は無情過ぎやうぜ。もう何も言ひはしねえから、此方を向いてくれ、よ、ヘクトル。何もそんなに腹を立てねえでも好ぢやねえか。これさ、どう志たものだ。」(「狭黒児」p. 400)

Cæsar, unmoved by Hector's anger, continued to speak of Mr. Edwards with the warmest expressions of gratitude; and finished by declaring he would sooner forfeit his life than rebel against such a master. He conjured Hector to desist from executing his designs; but all was in vain. Hector sat with his elbows fixed upon his knees, leaning his head upon his hands, in gloomy silence. (*The Grateful Negro*, p. 243)

二毛子該殺剝。我何嘗和他們講交情。好好。(〈狭男奴〉 p. 13)

- (45) 命は已にエドウアノドに奉げたる我等夫婦が、義は金鉄に比してなほ堅きを、然りとは浅々しくも卑怯なる彼等が所為かな。(「狭黒児」 p. 410)

When she explained to Cæsar the cause of her dejection, his natural courage resisted these superstitious fears; and he endeavoured to raise Clara's spirits. He endeavoured in vain: she fell at his feet, and with tears, and the most tender supplications, conjured him to avert the wrath of the sorceress by obeying her commands whatever they might be! (*The Grateful Negro*, p.249)

²⁰ 原作末尾に 1802 年 5 月とあることから、1802 年作と思われる

²¹ 中国語の翻訳では、直前に“奴隸”という語があるにも関わらず、修飾フレーズの“那鄰家愛德華家中養下”を同じく“奴隸”という語で受けている。表現が重複しているにも関わらず、人称代詞をこの位置に置くことはしていない。当時、“定語+人称代詞”構造が中国語としては不自然な構造であったと分かる。

俺夫妻両箇性命早已屬了愛德華。任是千刀万副那理義依然似金鉄般堅牢不能打破難道就怕那些奸詐的奴才們不成（(1906a: p. 21) 〈短編小説 俠男奴〉《東方雜誌》，第3年第2期）

- (46) デュラントは頻りに苛立ちて、理非の辨無き彼等に問答は無益なり。望む所は是ならむ、と滅多打に振下す、答の数は知れざりけり。（「俠黒児」p. 420）

Durant was not out of hearing. He turned suddenly, and observed that the negro looked at Hector when he pronounced these words, and this confirmed the suspicion that Hector was carrying on some conspiracy. He immediately had recourse to that brutality which he considered as the only means of governing black men: Hector and three other negroes were lashed unmercifully, but no confessions could be extorted. (*The Grateful Negro*, p. 252)

不覚也是怒從心上起。喝令責打。那鞭答不知有多少下。（〈俠男奴〉p. 29）

英語，日本語，中国語のうち，日本語の翻訳文にのみ，人称代詞を修飾する構造が現れているのが分かる。この日本語翻訳文は，台詞や地の文両方に用いられており，『万葉集』で使用されていた構造と比較すると自由度は高いものに思える。

「連体修飾語+人称代名詞」構造は『万葉集』『土佐日記』『枕草子』『源氏物語』の時代にも使用が確認されるが，当時は制限のある構造であった。明治期に至るまでに変化し，広い範囲で用いられるようになったことがわかるが，しかしながら英語や中国語の訳文と比較するに，19世紀末，明治時代には本構造はすでに独自に使用されていたといえる。近代に至るまでに，「連体修飾語+人称代名詞」はどのように変化したのか。「連体修飾語+人称代名詞」に外国語の直接的な影響はあったのだろうか。これらのことに関しては，今後の研究課題にしたい。

参考文献（50音順）

大島資生（2010）『日本語連体修飾構造の研究』ひつじ書房

大野晋（1992）『係り結びの研究』岩波書店

鍵本有理（1999）「万葉集における連体修飾—現代語との比較を通して—」『国文学』第78号，pp.373-388

鹿持雅澄（1898）『萬葉集古義』全10巻（近代デジタルライブラリー参照。

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/874315>（2013.3.1閲覧））

賀陽（2008）《現代漢語欧化語法現象研究》，商務印書館

菊澤季生（1936）『新興国語学序説』文学社

——（1955）「萬葉時代の代名詞」『萬葉集大成：6言語篇』平凡社，pp.49-66

源氏物語別本集成刊行会編（2008）『源氏物語別本集成続』第5巻，おうふう

呉妍（2011）〈漢日人称代詞受修飾現象比較〉《青年文学家》15期，青年文学家雜誌社，pp.159-161

佐伯梅友（1955a）「動詞・形容詞」『萬葉集大成』言語篇，平凡社，pp.67-78

——（1955b）「文の構成」『萬葉集大成』言語篇，平凡社，pp.157-187

朱徳熙著・杉村博文・木村英樹翻訳（1995）『文法講義：朱徳熙教授の中国語文法要説』，白帝

社, (2009年5刷)(中国語原著1982)

鈴木孝夫(1996)『教養としての言語学』岩波書店

——(1973)「言語における人称の概念について(二) —主として英語の場合—」『慶応義塾大学言語文化研究紀要』第5号, 慶応義塾大学言語文化研究所, pp.67-78

孫維才(1990)〈日漢語人称代詞的修飾語比較〉《日語學習与研究》第6期, 《日語學習与研究》雜誌社

高橋太郎(1994)『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』むぎ書房

竹内美智子(1987)「古文における連体格」『国文法講義』第3巻, 明治書院, pp.71-115

陳承沢(1922)《国文法草創》, 商務印書館(1926年第4版)

陳風(2009)『連体修飾の日中対照研究—限定的修飾を中心に』牧歌舎

寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集1—日本語文法編—』くろしお出版

——(1993)『寺村秀夫論文集2—言語・日本語教育編』くろしお出版

時枝誠記(1954)『日本文法 文語篇』岩波書店

萩谷朴(1967)『土佐日記全注釈』角川書店

馬燕菁(2010)〈從《紅樓夢》看漢日語人称代詞差異—基於人称代詞受修飾現象的考察〉《紅樓夢學刊》2010年第6輯, 紅樓夢學刊雜誌社, pp.227-247

福田良輔(1955)「東歌の語法」『萬葉集大成:6言語篇』平凡社, pp.241-268(なお, 文末に「一九五三・一〇稿, 一九五五・四補筆」とあり)

正宗敦夫(1929)『萬葉集総索引:単語篇』白水社、(近代デジタルライブラリー参照。

<http://kindai.ndl.go.jp/> (2013.3.1閲覧)『萬葉集総索引:単語篇』1944年発行, 伊藤書店)

増田茂夫校注(1987)『枕草子』和泉書院

村木清一郎訳(1959)『萬葉集(上)(下)』古典日本文学全集2-3, 筑摩書房

森岡健二(2001)『欧文訓読の研究—欧文脈の形成—』, 明治書院

柳父章(1982)『翻訳後成立事情』岩波書店

楊凱榮(2011)「日中連体修飾節の相違に関する考察」『漢日語言対比研究論叢』第2輯, 北京大学, pp.1-32

李長波(2000)「『カレ』の語史とその周辺—三人称代名詞が成立するまでのみちすじ」『DYNAMIS:ことばと文化』4号, 『デュナミス』編集委員会, pp.1-33

呂叔湘(1955)〈語法札記:五 三身代詞前有加語〉《漢語語法論文集》, 科学出版社(原著初出1944-47)